

序章／背景

現代の都市は、道と実体（たとえば建築物）の分節により連絡性が失われている。これらの分節は実体をより孤立させるばかりである。人間関係の希薄な都市においてこそ、道と実体は有機的な関係にあるべきである。そのきっかけを作るには、実体間に生まれる空虚な空間を、人の目が行きとどく管理された空間にすることだろう。この問題を解消することが、当面の再開発問題をはじめとする、環境問題だけでなく都市の未来をも考慮した都市設計の一端となると考える。

第一章／問題提起「なぜ連絡性が失われたのか」

第二次世界大戦後、人口が飛躍的に増加した。これにより、居住空間を増加させなければならなくなり、自給に不可欠な農地と居住空間は切り離された（土地利用問題）。また環境装置も変化した。例えば地上に流れていた生活排水も下水道として地下にもぐり、大衆の目にさらされることはなくなった。このように今まで大衆の目で管理されることで循環していた都市が、土地利用問題や環境装置の変化により壊され、現在も続いている。そして様々な分節が生じ、実体間に連絡性のない空虚な空間を生じさせていると考えた。この分節の代表的なものを以下に図示する。

【形而上の繋がりから形而下の繋がりへ発展した】

fig.1 人間からみた都市
…人口増加による実体の分節

fig.2 物質からみた都市
…道路開発による交通的分節

【水のフロー的分節】
【物質のフロー的分節】

fig.3 自然からみた都市
…機械装置によるフロー的分節

現代の日本で、このような状況がもっとも顕著に現れている事例は再開発問題だと考える。作り手である国が、車社会を優先するために建造する「道」により従来の連絡性が失われ、住まい手である住民との衝突を生んでいる。再開発問題における、作り手と住まい手双方の妥協点を探ることが、連絡性を維持し、管理された空間を創造することへつながると考えた。

第二章／日本における連絡性維持の特徴

まず、連絡性の欠如を補うための「要素」を考察するためには、かつて日本がどのように循環システムを築き管理したのかを理解することが問題解決への糸口であると考え、私は縄文から江戸時代までの環境装置の変遷を調べた。その結果、都市の構造は、「防衛」と「応接」という二つの機能が作用し合うことにより、管理され、発展していったという考察に至った。

fig.4 防衛…外敵から領土や身を守る
fig.5 応接…外との交流による発展



第三章／敷地調査「現在の東京の特徴」

現在の東京の特徴は一言で現すと、その形成の基となった「城下町タイプ」と表現できる。それと相反するものが京都の「都城タイプ」である。城下町は城を中心とし、城を守るように円環状に住居を構えていた。すなわち住居という実体を優先し作られている。一方で都城は道優先すなわち車優先で作られており、これが基盤目状となった所以である。過去の日本においては、構造のDNAが異なる城下町も都城も、「防衛」と「応接」の二つの機能が働くことで、連絡性が維持されていたが、両者は均等に働いていた訳ではない。城下町は防衛の構造、都城は応接の構造を基礎として、人々の生活レベルに対応した、応接と防衛の機能が入れ子状に組み込まれる（fig.6）ことで、連絡性を維持していたと考えられる。以下、城下町タイプを「防衛の系／防衛的応接の構造」、都城タイプを「応接の系／応接的防衛の構造」と呼ぶ。

【防衛の系】
priority: "IN" Point to Face

【応接の系】
priority: "OUT" Point to Point

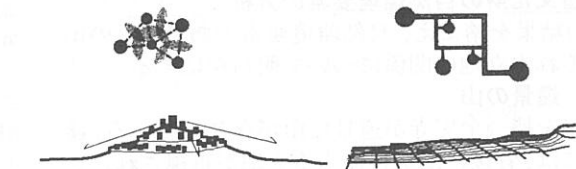


fig.6 系における防衛と応接の呼吸

再開発問題において、作り手は車の利便性を追及するため応接の構造に固執しがちである。しかし「防衛の系」の図に見られるように、江戸を起源とする現在の東京は実体優先で作られた、防衛の構造を持つ土地である。かつては「防衛的応接の構造」が働くことで連絡性を維持していたが、先に述べたように様々な分節により現在の東京は道のみを共有する連絡性が失われた土地となったと言える。

つまり、城下町という複雑な地形を持つ東京にとって防衛的応接の構造であることが、連絡性維持のための最適な状態であるといえる。しかし従来の防衛の系は、先に述べたような分節により崩壊してしまっている。従って、現代または将来の東京に適合する、防衛的応接の形を提唱することが必要となる。

第四章／異なる系における構造の比較分析

都市を構成する際に重要な、実体、道、そして環境装置に絞って都城と城下町、それぞれの都市に、防衛と応接の呼吸がどのように組み込まれていたのかを比較した。

【比較分析の詳細表】

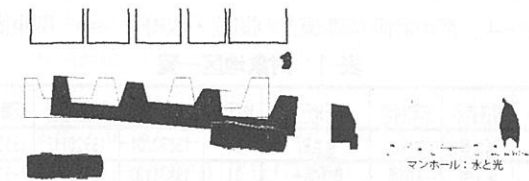
	町割／表層と角部 実体	線の長短／接合部 道	地形／土地利用／交流 環境装置
形態	z: void/pile y x	Alley Road	私 公 都市
機能	ヴォイド なにを共有 しているのか	シークエンス 管理の目がどこに 向けられているか	フロー 実体と実体を結ぶ 人々の文化的領域

結章 提案設計

城下町では道以外にも、実体と実体を結ぶもの（例えば水、光、音など）を共有しており、住まい手とつくり手がこれらを相互に管理し合う事によって連絡性を維持していた。この、城下町における防衛の系から抽出した図像を現代の社会的条件に落とし込むことが、新しい防衛的応接の構造をつくり、道と実体を有機的に繋ぐきっかけとなると考えた。そして今後、道の質がどう変化しようとも住まい手側が対応できるように、都城の応接的防衛の機能をもたせる必要があると考えた。江戸と東京におけるズレ、すなわち失われた形而上の共有物を割り出し、それらが、城下町と都城から抽出した図像と、相同性をもつことにより生まれる、防衛的応接の構造が以下に述べる、六つの形である。

熱 common heat

Plan for visitors.
点を加速した。線の広がり時速100キロ
点をちりばめた、面的広がり時速40キロ。速度によって通行きは異なる。



提案：防衛的応接＜応接的防衛	図像例	機能
城下町	城下町	・目隠しの壁 ・一間分のおもてなし ・列柱と庇
都城	都城	・車には車の 人々には人の応接

「都城と城下町を比較したこの表は、江戸から東京へ発展した際に失われた、分節の複合性を調べる表でもある。この分節の調を埋めるものが、京都の応接的防衛の構造、ということになる。

光 common lights

CHANGE the flame for playing chess with the SKY
「もっと近くの関係性を考える。囲碁の世界」
小さく重なり合う構造は、いろいろな光を取り込む。場所を選択する幅が広がる。



提案	機能
before after	城下町 ・視界の広がり ・全体の把握
都城	・上下の分節 ・形の明快さ

水 common water

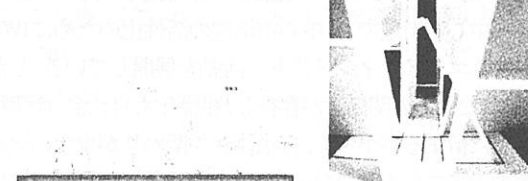
All Roads Lead To Relief.
「全ての道は救済のために」
水を中心とした空間を相互に繋げて
防災とゆとりの空間をつくる。



提案	機能
城下町	・高低差を利用し、 公私で管理する上水道 ・共有の水の道
都城	・囲いの中の都地から 回遊式庭園 ・アメニティとしての水

音 common sounds

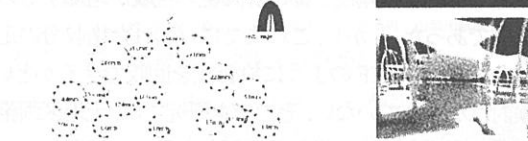
facade with rhythm / 表層に音楽を
箱の中に閉じ込められた音は、
孔の抑え方によって調和する



提案：防衛的応接＜応接的防衛	機能
城下町	・共有壁による 視界の遮断 ・防火のための卯建つ
都城	・屋根を抑える機能 から店の看板として 使われた卯建つ 「うだつが上がらない」

風 common wind

Tunnel in Mt. COLUMN
「道に少しずつふくらみを
大きな屋根で一体感を」



提案	機能
城下町	・道の管理 ・共有の中庭
都城	・路地の管理 ・オモテとウラ

関心事 common interest

the Direction rotate on an axis.
ただ、横切るのはなく、散歩したくなるような
もっと楽しい道にする。点から点ではなく、点から面へ



提案	機能
城下町	・交差点が少ない ・地形に従い みんなて一つの山 をつくるイメージ
都城	・大量の交差点により 曖昧な境界 ・分かりやすい角度